

女子大学生によるスクールカウンセラーに対する 認識と要望

伊藤 嘉奈子 (子ども心理学科)

Female University Students' Counseling Needs and Perception of the School Counselor

Kanako Ito

Department of Child Psychology, Kamakura Women's University

Abstract

The purpose of this study is to investigate female university students' counseling needs and perception of the school counselor. This survey was conducted in 2013, and the participants were 56 female university students. They were asked to respond to questionnaires that consisted of free remarks. A category analysis of the free remarks revealed the following.

The results were as follows;

- 1) The percentage of the students who knew the dispatch of the school counselor in their junior high school was 78.6%.
- 2) Most students had a negative image of the school counselor.

It was suggested that there is a necessity for a full-time school counselor.

Key words : school counselor, image of school counselor, counseling needs

キーワード：スクールカウンセラー、スクールカウンセラーのイメージ、相談ニーズ

I. 問題と目的

1995年度に、文部省（当時）は、いじめや不登校の増加等に対応するため、学校におけるカウンセリング機能の充実を図ることを目的として、スクールカウンセラー（以下、SCと略す）の導入を始めた。それから18年が経過した平成25年度には、「いじめ対策等総合推進事業」が実施されることになり、いじめの早期発見・早期対応を図るためにSC配置を拡充することになった（文部科学省、2013a）。

2013年度（平成25年度）におけるSC配置は、

中学校への配置が9,835校の全校配置、小学校への配置が13,800校と、全校の約65%に拡充された。さらに、緊急支援派遣として、201校にSCが派遣された（文部科学省、2013b）。このようなSCの配置拡充や活動の幅の広がりには、SCに対する期待や要求が高まっていることを示唆すると言えよう。同時に、SC活動の有用性を評価し、その結果を今後のSC活動に活かすことが常に求められているとも言え換えられよう。

ところで、SCに対する評価に関する研究は、SC導入初期から行われており、主に、児童・生

徒、保護者、教員の3つのSC利用者による調査研究が実施されてきた。中でも、教師によるSC評価の研究が多くを占めており（例えば、伊藤・中村,1998；伊藤,2000a；伊藤,2000b；河村・武蔵・粕谷,2005など）、どの研究においても、SCへの評価結果は概ね高いものであった。近年の研究としては、吉澤・古橋（2009a）が福岡県内の中学校教師100名に対して実施した質問紙調査がある。結果は、前述の先行研究と同様、大半の教師がSC活動に対して高い評価をしており、SCの拡充を希望していることがわかった。

一方、教師への調査に比べ、児童・生徒への調査研究は少ない。例えば、佐光・時田・千明（2007）は、中学生449名に質問紙調査を行い、SCとの関わりや相談ニーズ、SCのイメージを明らかにした。その結果、SC派遣を認知していたのは4割で、SCに相談したことのある生徒は1割弱と少ないことがわかった。また、因子分析の結果、SCのイメージは、受容的・身近な・静的なイメージがあることが明らかとなった。そして、相談へと結びつけるために、SC便りが単なる広報にとどまらず、中学生の心の健康を増進する、より予防的、啓発的、教育的な内容が盛り込まれることが重要と述べている。さらに、吉澤・古橋（2009b）は、福岡県内の中学1～3年生1231名に対して、SCに対する評価に関する質問紙調査を実施した。その結果、生徒はSCと一緒に悩み事や困ったことを考えてくれる人ととらえており、特に、SCに相談した経験のある生徒は、SCの活動を高く評価したことがわかった。また、土田・三浦（2011）は、小学校におけるSCとして、不登校の防止を目的とし、小学4～6年生計557人に対して心理的ストレス尺度を実施した。その結果をSCと教員とで共有し、教員が介入的アプローチを行ったところ、介入的アプローチが効果的であり、また、教員とSCとの協働の可能性を示唆するものだったと述べている。

以上のように、児童・生徒に対して実施した大規模な質問紙調査の結果は、非常に有益なものであるが、研究は少ないのが現状である。その理由として、本間（2011）は、調査による児童・生徒

本人への影響を考えた際に、実質的に困難であるためと述べている。そこで、石原（2012）は、大学生であれば、中高生の頃の経験を基にしたSCの認識を問うことは可能であろうし、適応的に生活をしている大学生に、本人の自由意思で回答を求めるならば、本人に悪影響を及ぼすまでは考えられず、むしろ、その結果をSC事業の深化に活かすことができるのは重要なことであろうと述べている。そして、大学生150名に質問紙調査を行い、SCとの関わり経験とSC認識との関連を明らかにした。その結果、全般にSCと関わり経験がある場合に、SCへの肯定的認識が高く、SCと関わり経験がない場合は、SCについて理解されにくい面があることがわかった。また、SCの働きとしては、単に共感するだけでなく、心理臨床の専門的見立ての力、コミュニティ援助の力と認識されていることや、今後のSC拡充が期待されていることがわかった。この研究では、相談環境に関する質問項目が不十分だった点を今後の課題と述べており、量的研究の限界が伺えた。

そこで、本研究では、調査対象者は石原（2012）と同様に考え、公立中学校への全校配置が進み始めた2008年前後の時期に中学生だった者を対象とし、大学生になった現在、小学校から中学校当時を振り返ってもらうことにした。そして、SC利用者側としてSCをどのように認識しているか、および、SCに対してどのようなニーズを持っているかを明らかにすることを目的とした。SC利用者に対する先行研究では、一般性を追求するような量的研究が多くを占める。しかし、児童・生徒からの具体的なSCの認識や相談ニーズ、SC評価を明らかにするためには、個性性を探求する研究が求められると考える。そこで、本研究では、質的研究を研究手法として用いた。そして、SC事業の今後の課題を検討したい。

II. 方法

1. 調査時期・方法：質問紙法にて、2013年5月に実施した。
2. 調査対象者：神奈川県私立女子大学児童学部子ども心理学科1年生56名を対象とした。

3. 調査内容：「SCが小・中学校にいたか」と「SCを利用したか」について選択肢にて回答を求めた。さらに、「SCの仕事とはどのようなものか」と「SCへの要望」について自由記述にて回答を求めた。
4. 分析方法：自由記述については、客観的なデータを抽出し、カテゴリ分析を行い、質的帰納的分析方法を用いた。その他は、単純集計を行った。分析作業は、筆者の他に、臨床心理士でSC経験のある者とともに検討した。
5. 倫理的配慮：調査対象者には、口頭と文書で研究の目的・方法、参加・辞退の自由、データ管理、プライバシーの保護について説明し、同意を得た。

Ⅲ. 結果と考察

1. SCの有無、SC利用の有無

小・中学校時に「SCがいた」と認知していたのは、中学校に関しては全体の78.6%と多かったが、小学校に関しては42.9%と半数以下であった（Table 1）。また、「不明」の記述が、小学校では、全体の32.1%と高かったことも特徴であった。また、SCを利用したのは、小・中学校での利用者を合わせて7人であり、利用率の低さが顕著であった（Table 2）。

2. SCの仕事に対する認識

SCの仕事とはどのようなものかについての具

体的記述を分析した結果、127記述単位が抽出された（Table 3）。カテゴリ分析の結果、7つのカテゴリと14のサブカテゴリに分類された。以下、カテゴリ別にその特徴を記述していく。なお、記述にあたっては、各カテゴリを【 】, サブカテゴリを<>、具体的記述を「」で示す。

1) 【話を聞く】

【話を聞く】は、<相談にのる>、<内容にかかわらず話を聞く>、<周りに相談できないことを聞く>という3つのサブカテゴリで構成された。「個人が円滑な学校生活をおくれるよう、困ったときには個人のプライバシーを保ちつつ相談にのる」ことや「相談に来た人の悩みを内容に関係なく聞いてくれる」、「誰にも言えない、話したくないと思っても自分で抱えるのはつらいと思っている人達の話聞く」など、まずは子どもの話を聞くことがSCの重要な役割であると認識されていた。

2) 【子ども中心】

【子ども中心】は、<子どもと一緒に考える>、<子どもの気持ちの変化を促す>の2つのサブカテゴリで構成された。「悩んでいることがあれば悩みを共有してくれ、一緒に解決策を考えてくれる」、「精神的（メンタル）な部分の不安や悩みを解決、または良い方向に向かうように手助けする」というように、子どもと関わる際に子ども中心に考える視点を持っていることが挙げられた。

3) 【援助する】

【援助する】は、<解決策を考える>、<特定の児童・生徒に対応する>、<アドバイスする>、<心のケア>の4つのサブカテゴリから構成された。「子どもの悩みに具体的な解決策を提示する」や、「教室に行けない生徒を相談室に登校させて、なるべく登校できるようにする」、「どんな悩みに対しても真剣に話を聞いてアドバイスをくれる」、「子ども達の精神的なケアを行い、健康に学校生活を過ごせるようにする」など、手助けを必要としている子どもに対して何らかの援助を行い、状況を改善していくことがSCの仕事であるという認識が挙げられた。

4) 【周りとの連携】

Table 1 SCの有無

	人 (%)			
	いた	いない	不明	合計
小学校	24 (42.9) [公立23、私立1]	14 (25.0) [公立13、私立1]	18 (32.1) [公立17、私立1]	56 (100)
中学校	44 (78.6) [公立39、私立5]	6 (10.7) [公立5、私立1]	6 (10.7) [公立4、私立2]	56 (100)

Table 2 SC利用の有無

	人 (%)		
	利用あり	利用なし	合計
小学校	4 (7.1)	52 (92.9)	56 (100)
中学校	3 (5.4)	53 (94.6)	56 (100)

【周りとの連携】は、＜家庭への関わり＞、＜先生への関わり＞、＜学校・専門機関への関わり＞の3つのサブカテゴリーで構成された。「自分の子どもについての悩みを相談できる相手がいなような親の話を聞く」ことや、「守秘義務があるが、必要な場合には、担任、校長、養護教諭、

専門機関と連絡を取りあってサポートしていく」ことなど、家族や先生、学校・専門機関などに対しても必要な際には専門的に働きかけを行いながら、子どもと関わっていくことがSCの仕事と認識されていた。

5)【専門的な仕事】

Table 3. スクールカウンセラーの仕事の認識に関する自由記述

総記述数：127

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的記述	記述数
話を聞く	相談にのる	学校生活において悩みを抱えている児童・生徒の話を聞く 個人が円滑な学校生活をおくれるよう、困ったときには個人のプライバシーを保ちつつ相談にのる	31
	周りに相談できないことを聞く	誰にも言えない、話したくないと思っても自分で抱えるのはつらいと思っている人達の話を聞く 何か悩みがあって担任や親、友達に言えないことがあったら専門のカウンセラーとして相談にのってくれる	7
	内容にかかわらず話を聞く	相談に来た人の悩みを内容関係なく聞いてくれる 話を聞いてあげる、愚痴とか、言いたいことを言えるように促してくれる	5
子ども中心	子どもと一緒に考える	悩んでいることがあれば悩みを共有してくれ、一緒に解決策を考えてくれる 児童・生徒の悩みなどの相談を受け、それを児童・生徒自身の力で解決できるようにアドバイスする	11
	子どもの気持ちの変化を促す	精神的（メンタル）な部分の不安や悩みを解決、または良い方向に向かうように手助けする 前向きな気持ちをもっていってあげるようにする	11
援助する	特定の児童・生徒に対応する	教室に行けない生徒を相談室に登校させて、なるべく登校できるようにする いじめや不登校などの問題に立ち向かう	11
	アドバイスする	友達関係のこと、家族のことで悩みがあったら聞いてくれてアドバイスをくれる どんな悩みに対しても真剣に話を聞いてアドバイスをくれる	8
	心のケア	子どもたちの精神的なケアを行い、健康に学校生活を過ごせるようにする 解決策を一緒に考えながら心のケアをしていく	6
	解決策を考える	子どもの悩みに具体的な解決策を提示する 学校の悩みを聞き、解決方法を教える	5
周りとの連携	先生への関わり	子どもだけでなく、先生の話も聞いたりして、学校が良い方向に向かうように協力していく 教員と必要なときに連携する	5
	家庭への関わり	自分の子どもについての悩みを相談できる相手がいなような親の話を聞く 学校だけでなく家庭での子どもの環境を良いものにする手助けを行う	3
	学校・専門機関への関わり	守秘義務があるが、必要な場合には、担任、校長、養護教諭、専門機関と連絡を取り合っ てサポートしていく 先生や専門機関につなぐことを行う	3
専門的な仕事		子どもの心に専門知識をもった上で関わり、そばに寄り添う 精神面でのプロフェッショナル	5
受容的態度	受け止める	子どもの悩みや相談を聞いて、気持ちを理解し、受け止めてあげる どんな児童・生徒でも受け入れる	6
	支える	子どもたちを影から支えている存在 子どもたちの心の支え、安心、心の居場所	5
第三者としての関わり		先生に話したことは、他の先生や外部にもれてしまうのではないかという不安が子ども側にはあると思う。スクールカウンセラーは、教師という枠から外れている存在 悩みがあっても、先生や親、友達には話せなくて困っている子どもの話を唯一ちゃんと聞いてあげられる第三者	5

【専門的な仕事】は、「子どもの心に専門知識をもった上で関わり、そばに寄り添う」など、SCとは専門的な知識を持ち、それを活かして子どもと関わっていく仕事という認識が述べられていた。

6) 【受容的態度】

【受容的態度】は、〈支える〉、〈受け止める〉の2つのサブカテゴリーで構成された。「子どもたちの心の支え、安心、心の居場所」となることや、「子どもの悩みや相談を聞いて気持ちを理解し、受け止めてあげる」など、子どもと関わる際に、SCが持つべき受容的態度が挙げられた。

7) 【第三者としての関わり】

【第三者としての関わり】は、「悩みがあっても、先生や親、友達には話せなくて困っている子の話を唯一ちゃんと聞いてあげられる第三者」として、先生や友達、家族とは違う、やや心的に距離のある第三者であるからこそ、子どもが話をしやすく、他の先生方などには解決が難しいことにも対処できるという点が挙げられていた。

ここで、SCの仕事について、カテゴリー間の関係を示したのが Fig.1 である。SCの仕事は、【話を聞く】というように、子どもの話を聞いて、悩みや問題を表出するように促し、把握することから始まると認識されていた。そして、子どもの

話を聞く際には、子どものことを支え、受け止めるといった【受容的態度】が求められる。こうして【話を聞く】過程で、子どもを様々な視点を踏まえて【援助する】ことにつなげていく。この【援助する】とは、子どもの悩みを改善し、状況を良くしていくために解決策を考え、アドバイスし、心のケアを行うことなどと認識されていた。その一方で、子どもを【援助する】際には、子どもに対してSC側からただ一方的にアドバイスや指示をするのではなく、子どもと一緒に解決策を考えていくことや、子ども自身が自らの気持ちへの気づきを深め、自らの力で問題を乗り越えていけるように促すような関わりをするなど、【子ども中心】の関わり方を意識していく仕事とも認識されていた。また、【援助する】を行うにあたっては、【専門的な仕事】であるSCとして、専門的な知識を用いて子どもの問題に対処していくという点が認識されていた。

こうして、前述の【話を聞く】ことによって得た情報などを基にして、【周りとの連携】の必要性や、連携のあり方などを検討し、情報の共有化を図り、【援助する】ことに活かしていく。そして、SCの仕事というものは、SCという、子どもにとって先生や友達など近い存在の人とは違う、

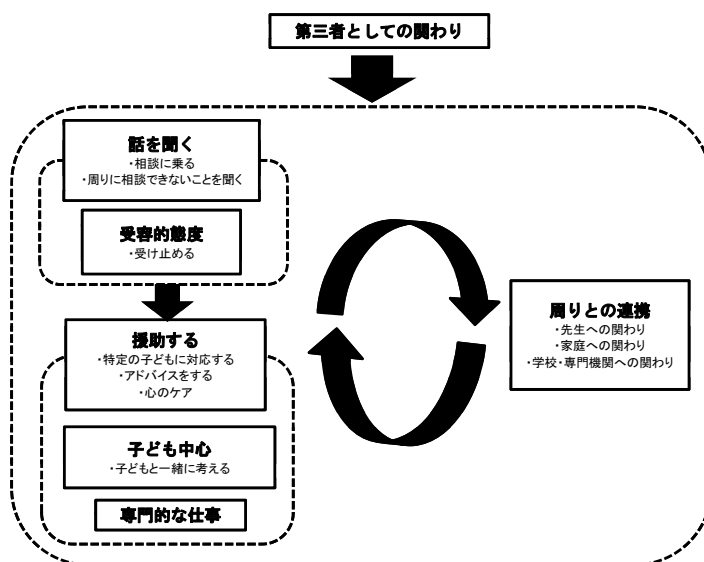


Fig. 1 スクールカウンセラーの仕事に関する認識

第三者の立場であるからこそ行うことができるものと認識されていた。子どもの立場から考えると、SCが第三者ゆえに、気兼ねなく話をするができる。さらには、子どもへの対応のみならず、周りの環境調整などもできる存在であることが認識されていた。

以上より、SCが良いイメージとして定着し、さらに、相談するという行為が肯定的イメージや効果的であるという評価へと結びつくような働きかけを行うことが今後の課題と考える。ただし、悩みをすべて吐露させ、相談することが良いこととは一律的に言えない。まずは、相談したくてもできないような潜在的ニーズを携えているものの、行動に至らない子どもへどのようにアプローチするかを検討することが重要と考える。

3. SCに求めること

SCへの要望に関する具体的記述を分析した結果、181記録単位が抽出された（Table 4）。カテゴリー分析の結果、5つのカテゴリーと18のサブカテゴリーに分類された。以下、カテゴリー別にその特徴を記述していく。なお、記述にあたっては、各カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを〈 〉、具体的記述を「 」で示す。

1) 【実体験】

【実体験】は、〈マイナス経験〉、〈プラス経験〉、〈利用希望〉という3サブカテゴリーで構成され、小学校から中学校までのSCの現状が、本音と経験談で述べられていた。「本音を言うと話を聞いてほしかったので利用しなかった」や「利用してみたいけれど、どういうことができるのか」わからないといった思いもあり、利用するに至らなかったことが挙げられた。その他、「SCの人が誰にも言わないと言っていたのに担任が知っていたことがあり、信用できないと思った」というマイナス経験からカウンセリングに対し抵抗感を持つ人がいる反面、「話しやすい雰囲気私のために泣いてくれた」などのプラス経験から、SCに対し好意的な思いを持つ人もおり、各自のSCとの接触経験から得た感情が、その後のSCへの印象や要望に影響を及ぼしていることが伺えた。

2) 【カウンセリングへの否定的思い】

【カウンセリングへの否定的思い】は、全カテゴリーの中で記述数が最も多く、47記述数が挙げられ、全体の26.0%を占めた。そして、このカテゴリーは、〈マイナスイメージ〉、〈ためらい・恥ずかしさ〉、〈接点のなさ・情報不足〉、〈身近な人への相談〉という4サブカテゴリーで構成された。「本当に大きな悩みがないとSCの所に行ってはいけないイメージがある」や「行くのをためらった」、「SCの方の顔も知らない」、「悩みがあっても身近にいる先生・親・友達の方が相談しやすいと感じる部分もある」など、カウンセリングに対しマイナスイメージがあるため、利用するのをためらってしまうことや、SCとの接点のなさから身近にいる人に相談してしまう現状が挙げられた。このように、学校現場にカウンセリングという行為が根付いておらず、相談に行くことは非常に敷居の高いものとの認識が反映されている記述が目立った。

3) 【カウンセリング室への要望】

【カウンセリング室への要望】は、〈立地条件のマイナス面の改善〉、〈行きやすい・気軽な雰囲気〉、〈相談しやすさ・話しやすさ〉という3サブカテゴリーで構成された。「教室はあまり目立たない所であってほしいと思う」という思いもある反面、「学校にもよると思うが、場所も影が多い暗い所にあつたので、明るい印象にするだけでも入りやすくなるのではないか」や「プライバシーなどを重視しているからだと思うのだが、もう少し利用しやすい雰囲気があると嬉しい」という意見もあり、「学校側がもっと相談しやすいような環境を作ると良い」や「もっとSCに相談しやすい状態を作ってほしい」など、カウンセラー室への環境的な配慮を求める意見が挙げられていた。

4) 【相談システムへの要望】

【相談システムへの要望】は、〈情報の提示不足〉、〈勤務形態〉、〈予約制の弊害〉の3サブカテゴリーで構成された。「先生がSCについて教えてくれたり、来ている日を教えてくれたりすることがなかった」という学校側からの情報不足から「SCについて知ってもらって活動があると良い」という要望や、「SCは毎日いるのではなく、決められた

Table 4. スクールカウンセラーへの要望に関する自由記述

総記述数：181

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的記述	記述数
実体験	マイナス経験	雰囲気がすごく怖い感じ（冷たい）がした。 カウンセリング室に行った子が、みんなに陰でいろいろ言われていた。 スクールカウンセラーの人が「相談内容は誰にも言わない」と言っていたのに、担任が知っていたことがあって、信用できないと思った。	11
	プラス経験	小学校の頃、友達が相談室登校をしていて、スクールカウンセラーは、その子がクラスメイトとふれ合える機会づくりを一生懸命に行っていた。 中学の時のスクールカウンセラーの人がとても良い人だった。	6
	利用希望	本音を言うと、話を聞いてほしかったので利用したかった。 今思えば、カウンセラー室を利用しなかったことが少しもったいないと思える。 利用してみたいけど、どういことができるのか疑問があった。	4
カウンセリングへの否定的思い	接点のなさ・情報不足	スクールカウンセラーがいたかどうか自体知らない。 スクールカウンセラーは、専用の部屋にずっと籠っていて、名前も顔も知らなかった。 子どもたちからすれば、スクールカウンセラーとは得体の知れない外部者のようなもの。	24
	マイナスイメージ	スクールカウンセラーの所に行く→いじめなどを受けている、精神面に傷がある、とみなされる印象。 深刻な悩みを持つ子が利用するイメージ。 「カウンセラー」と聞くと、話が大量になりそうな気がして行きづらい。	13
	ためらい・恥ずかしさ	相談に行くのは「恥ずかしい」とか「行きづらい」ということをなくしてあげたい。 相談に行くのが「恥ずかしい」と思うことがあった。	5
	身近な人への相談	悩みがあっても身近にいる先生・親・友達の方が相談がしやすいと感じる部分がある。 保健の先生の方が親しみを持てた。 中学の頃は、担任に話を聞いてもらって心が軽くなっていた。	5
カウンセリング室への要望	行きやすい・気軽な雰囲気	もっと気軽に相談に行っていいたいということを広めれば、もっと利用する人が増えると思う。 もう少し開放的（入りやすい）空間だったら良い。 気軽に利用できる雰囲気にしてほしい。	13
	相談しやすさ・話しやすさ	気軽に相談に行けるというのが一番重要。 悩みのある児童・生徒が、気軽に相談できるようにしてほしい。（環境的な意味で） とにかく、いろんな話を聞いてほしい。	11
	立地条件のマイナス面の改善	高校の時は相談室が離れたところにあって、とても行きにくかった。 スクールカウンセラーのいる部屋を学校内の目立たない場所にした方が良い。 悩みを持っている人が行きやすくなる工夫が必要。	9
相談システムへの要望	情報の提示不足	先生たちがスクールカウンセラーについて話をしていなかったため、ほとんどの子が存在すら知らなかったと思う。 スクールカウンセラーについて知ってもらう活動があるといい。 スクールカウンセラーの方がどういう人なのかわかるようにしてほしい。	18
	勤務形態	毎日学校にいてほしい。 週3くらいしか学校に来てなかった。 スクールカウンセラーの潜在期間が短かったので、長い期間いてくれると馴染みをもって相談しやすかったと思う。	11
	予約制の弊害	担任の先生には知られたくないのに、先生に予約を言わなければいけないのが嫌だった。 予約をしないといけないのが嫌だった。 他の児童・生徒との鉢合せや、カウンセラー待ちを減らすためには、予約が必要。	7
カウンセラーへの要望	親しみやすさ	普段から常に学校にいれば親しみやすいのかなと思う。 身近にあると感じられたら良い。 親しみやすさがあると行きたくなったり、利用しやすくなると思う。	21
	接点（関わりやすさ）	スクールカウンセラーは、もっと児童・生徒と関わる機会を増やした方がいいのではないか。 授業に参加したり、世話係、声掛けなどをもっとした方が良い。 カウンセリング以外でも、児童・生徒と交流してほしい。	13
	より積極的な介入	しっかりと悩みを解決してあげてほしい。 「家庭のこと」などプライバシーはあるけれど、子どもの心身の健康のために家庭へも積極的にアプローチしてほしい。	4
	存在感	少し存在感を出してほしい。 スクールカウンセラーの存在をもっとアピールすべきだ。	3
	信頼性	信頼できる人かどうかが重要。 秘密を絶対守ってくれるのが大事。	3

曜日しか来なかったの、曜日設定をしないでなるべく毎日来てほしい」という勤務形態に対する要望が挙げられた。また、「予約制なのは良いが、担任の先生には言えない、知られたくないのに、先生に予約を言に行かなければならないのが嫌だった」という予約システムに対する不満から「SCの人だけに予約を知らせる方法があれば良い」という予約制の改善を求める記述もあった。

5) 【カウンセラーへの要望】

【カウンセラーへの要望】は、〈存在感〉、〈接点(関わりやすさ)〉、〈親しみやすさ〉、〈信頼性〉、〈より積極的な介入〉という5サブカテゴリーから構成され、SCを身近に感じたいという願いや、カウンセラーとしての力量を求める内容が記述されていた。具体的には「SCの存在をもっとアピールすべきだ」という意見からSCの存在感のなさが伺えた。そのため、「もっと話やすく親しい感じにしてほしい」、「児童・生徒と関わりがあった方が良い」、「教室の様子を見に行ったりしても良いのではないかなど、SCとの関わりを求め、児童・生徒にとって親しみをもてる存在であることが要望として挙げられた。また、「秘密を絶対守ってくれるのが大事」や「家庭のことなど、なかなかカミングアウトが難しい問題に直面したら、家庭にもプライバシーはあるが、思い切って積極

的にアプローチしてほしい」などの意見があり、SCには、カウンセラーという専門家として積極的介入の役割を取るよう求める要望もあった。

SCへの要望について、カテゴリー同士の関係をまとめたものがFig.2である。まず、【カウンセリング室への要望】、【相談システムへの要望】、【カウンセラーへの要望】の3つのカテゴリーが挙げられた。これらのSCへの要望は、単発的なものではなく、小・中学校のSCとの接触による【実体験】やマスコミや噂などから得た情報から表出している。例えば、SCとの【実体験】から、本当はSCを利用しなかったという本音や、利用した(周りの人が利用した)際に抵抗感を抱いたマイナス経験から【カウンセリングへの否定的思い】が生まれた。また、SCを利用した(周りの人が利用した)際に好意的な思いを抱いた者にとっては、プラスの経験をしたからこそ、当時の経験とは異なるSC全般に対する厳しく否定的な思いが生まれたと考えられる。その【カウンセリングへの否定的思い】では、深刻な悩みでないと相談に行ってはいけないという思い込み・誤解から、カウンセリング室を訪れることへの恥・ためらいへと至った。さらに、SCとの接点のなさから、悩みを相談する際に、児童・生徒は身近な人に頼り、相談に至ることが明らかとなった。そのような思

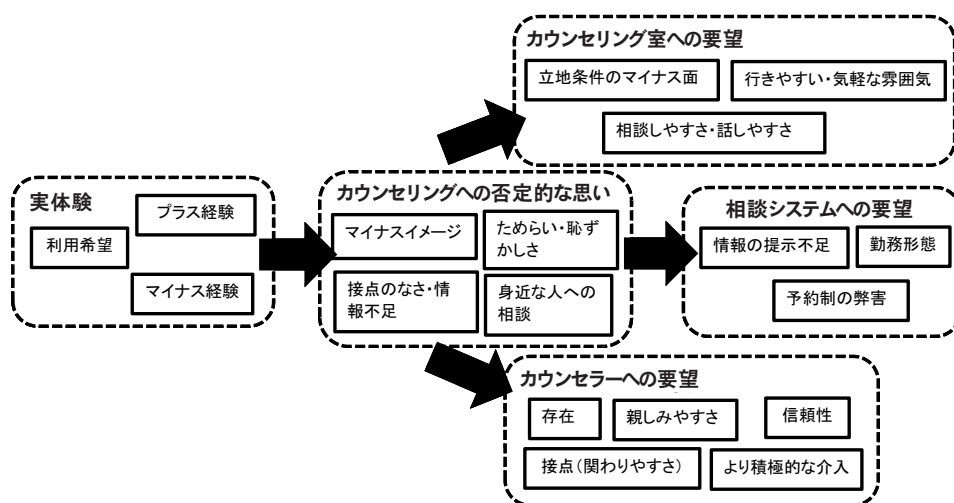


Fig. 2 スクールカウンセラーへの要望

いから、相談しやすく、行きやすい・気軽な雰囲気をもった【カウンセリング室への要望】が生じた。また、SCに関する情報を提示することや、SCが常勤化することで顔見知りとなり、相談しやすくなるという【相談システムへの要望】や、SCの存在感のなさから、より親近感をもってもらうためにも児童・生徒と関わりをもち、信頼できる存在になってほしいという、【カウンセラーへの要望】が挙げられたと考えられる。

以上より、SCから積極的に児童・生徒と接点(関わり)を持ってほしいという要望が明らかとなった。児童・生徒に普段から関わることで、SCの存在を示し、近づき難いと思われるカウンセリング室をより身近なものと感じてもらえると考える。また、積極的にSCの活動情報を提示する機会を設けることで、SCやカウンセリングに対する誤解やマイナスイメージが払拭でき、児童・生徒が必要と感じた際に、恥やためらいなく相談できるよう働きかけることが重要であろう。

4. 全体考察

小学校でのSCの有無については、4割の学生しかその存在を認知しておらず、SC利用もされていないことから、小学校当時は、SCについて把握していなかった者が多いことが伺えた。すなわち、小学校段階では、専門家に自己の悩みを相談するという行為自体が十分理解されていないことが伺えることと、自己の内面の言語化が困難な年齢ゆえに、自発的な相談活動は難しいことがSC認知やSC利用の低さに反映したと考えられる。小学校段階では、児童本人よりも、保護者などへの介入に重きを置き、保護者への相談活動を行うことで児童に変化が生じることも多いため、SCの周知化については児童のみならず保護者などへも働きかける工夫が必要と言えるだろう。

一方、中学校でのSCの有無については、8割の認知があったものの、SC利用には至っていない。中学校段階については、本研究で明らかとなったような、悩みを相談したいというニーズがあることが伺えるため、生徒に対して恥やためらいなく相談できるような働きかけが重要となるであろう。このように、SCの認知のされなさやSC利

用のされなさは、小学生と中学生では質が異なるだろう。よって、校種により、SC活動を工夫することの重要性についても改めて示唆されたと言える。

また、本研究では、SCの仕事については、調査対象者が心理学を専攻する学生ゆえ、カウンセリングで重視している専門知識を踏まえた内容が挙げられているように思われた。同様に、SCに求めることについても、本調査対象者は、将来、心理的サポートに携わる職業に就くことを希望する学生が多いため、子どもの利益を真剣に考えた記述がなされ、現状を客観的に分析した、厳しい記述が多く挙げられたものと考えられる。これらの意見は、小学生・中学生の当時よりも、大学生になってから、客観的にSCについて考えることができるようになったがゆえに挙げられたとも考えられるため、当手を振り返ってもらうような調査方法の有用性も示唆されたと言える。

IV. 今後の課題

調査対象者の出身学校や地域の特徴や、想起された自由記述が小・中学校どちらのSCの記述か分析していない点や、調査対象者が少なく、結果を一般化までできない点が本研究の課題である。さらに、調査対象者は、心理学を専攻とする女子大学生であったため、今後は、男子大学生や、さらに幅広い学科の学生を対象とした調査を実施し、男女差などについても分析することが課題と考える。

今後のSC活動の課題としては、より詳細にSCと児童・生徒がもっと接点を持てるような機会を作る工夫を、各学校の現状や特徴、相談ニーズを踏まえて学校全体で検討・実施し、実証的研究として蓄積し、SC活動をより充実させることと考える。さらにはSCの拡充化や常勤化がより大きな課題と考える。

引用文献

本間友巳 2011 最近の研究成果—スクールカウンセラー活動への評価を中心に— 臨床心理学増刊第3号 スクールカウンセリング 経験知・実践知とロー

- カリティ 金剛出版, 128-133.
- 石原みちる 2012 スクールカウンセラーに対する大学生の認識—スクールカウンセラーとの関わり経験による比較— 山陽論叢 19, 1-15.
- 伊藤美奈子・中村健 1998 学校現場へのスクールカウンセラー導入についての意識調査 教育心理学研究 46, 121-130.
- 伊藤美奈子 2000a スクールカウンセラー実践活動に対する派遣校教師の評価 心理臨床学研究 18, 93-99.
- 伊藤美奈子 2000b スクールカウンセラーに対する派遣校養護教諭の意識と評価 カウンセリング研究 33, 30-39.
- 文部科学省 2013a 平成25年度概算要求「いじめ対策関連事業」
 <http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/>
- 文部科学省 2013b 平成25年度予算額 「スクールカウンセラー等活用事業」
 <http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/>
- 佐光恵子・時田詠子・千明美佳 2007 スクールカウンセラーに対する中学生の意識～イメージと相談ニーズの観点から～ 上越教育大学研究紀要 26, 199-209.
- 土田まつみ・三浦正江 2011 小学校におけるストレス・チェックリストの予防的活用 カウンセリング研究 44, 323-335.
- 吉澤佳代子・古橋啓介 2009a 中学校におけるスクールカウンセラーの活動に対する教師の評価 福岡県立大学人間社会学部紀要 17, 47-65.
- 吉澤佳代子・古橋啓介 2009b 中学校におけるスクールカウンセラーの活動に対する生徒の評価 福岡県立大学心理臨床研究 1, 53-66.

追記

論文作成にあたり、本研究にご協力いただいた大学院生、および、学生の皆様に厚く御礼申し上げます。

要旨

本研究は、大学生に、小学校から中学校当時を振り返ってもらい、SC利用者側としてのSCの認識、SCへの要望を明らかにすることを目的とした。そして、積

極的にSCの活動情報を提示する機会を設け、SCやカウンセリングに対する誤解やマイナスイメージを払拭し、恥やためらいなく児童・生徒が相談できるよう働きかけることの重要性が示唆され、SCの拡充化や、常勤化がより大きな課題と考えられた。

(2013年10月1日受稿)